

リッ・サンハーラ（承前）

小野島，行忍

<https://doi.org/10.15017/2557071>

出版情報：文學研究. 13, pp.78-92, 1935-10-20. 九州文學會
バージョン：
権利関係：



リツ・サン・ハーラ

(承前)

小野島行忍譯

V 寒(九〇)

一

垂り穂の堆にはもうらぐはしく

いづこか栖すめる鳴のさへづり風情そへ

愛神(九一)さきはひ女のこのめる寒シ、ラてふ時を

むかも(九二)美しきひとよ聞け

(九〇) 寒季 (Sisira) は舊曆の十一月十六日より一月十五日までなり。

(九一) Kama は「愛欲」の意にして愛の神の名なり。こゝに

ては愛神すなはち情慾なり。

(九二) 「向股うつくしき人よ」とは作者が此の詩のきゝてなる女に呼びかけて云へるなり。

二

このときや

窓とざしたる家のうち

火と日の光おもたき衣

うらわかき女はひとの

たのしみ
怡逸となる

三

素影かとすゞしき梅檀も
あきの月きよき平屋頂も
霜こぼりてつめたき風も
いまは人の心を悦ばせず

四

しもむすぼれ降りてさむく
月の光にいよゝ冷くせられ
青白き銀河なゝめに美しき
夜々もひとにたのしまれず

五

リツ・サン・ハーラ

横椰子を口なくさみ

あぶらぬり華鬘つけ

蓮のかほは悦しき

美酒もてかぐはしく

憧れまどへる姝女は

いみじく伽羅の香に

にほへる閨屋に入る

六

(四二) まさなごと爲してせつに罵られ慄き

懼に心も空なる夫のいひ寄るをみて

愛悦そゝられし妻はとがをわすれつ

(九三) 雨一一・参照。

七

情こまやかなる若人に

小夜ふけて長時いらななく悦ばされ
疲れにむね悩めるうらわかき嫁女は
しのゝめ靜かに逍遙ふ

八

奶房うつくしき肌衣をまとひ
むね紅の絹装ひしたをやめは
ほとりに花を挿したる髪もて
寒さのきたるを飾るがごとし

九

八〇 (一五二〇)

泊美蘭の色(九四)の黄に映え
心嬉しくもてあそばれ
うらわかき溫味のある
よろしめの奶ぶさもて
むね押着られし愛人は
寒さもものかはと睡る

(九四) kunkuma (さくらん) は色化粧料として用ゐらる。

一〇

かぐはしき息差に揺ぐ
青蓮のごとく怡悦しく
よく世心をよびおこし
ほれんゝさする美酒を
身の毛よだてる嫁女は
いとしをと夜半に酌む

(九五) *hṛīṣā* とは嬉しさに身の毛よだてるを云ふ。

一一

マダラガ (九六) 愛神さう 奶くび夫の抱緊に

繁凝らせられしある若女は

いとしきひとに樂しまれし

その肌身ながめ微笑みつゝ

夙に閨屋より他の家に行く

(九六) *Madariṅga* は「情染」の意にして愛の神 *Kṛmā* の異名なり。こゝにては愛神すなはち情慾なり。

一二

また脰脰よかにして腰上ほそく
艶にうつくしき或るいとしめは

リッ・サン・ハーラ

伽羅のよき香ににほひ華鬘とけ

毛うら渦なす結髪はらゝかして

夜明ふしどを去る

一三

水に漱ぎしばかりに金蓮の

美しさもてるビムバの朱口

耳坡にかゝる淡紅の眶の目

肩にまつはる髪もて若女は

いまやあかつき家のま中に

吉祥天のごとくにぞ立てる

(九七) *śṛavāṇatātāpīkṛtā* (耳坡にかゝれる) とはその背が
耳朶にちかき位なゝめに大いなる眼のさまを云ふ。

(九八) *Śrī* は「美」または「榮」の意にして *Lakṣmī* (吉祥天)
の異名なり、この女神は *Viṣṇu* (毘紐紋) の妃にし
て美と福との神なり。

一四

またふくよかなる雌重に
おされて腰すこしたわみ
奶ぶさのおもみに弱りて
しづく歩むある郎女は
溝ふさの夜の衣とく脱し
晝に相應しき装ひをなす

一五

若女はほとり爪痕にみてる奶くびを眺め
齒にやぶられし花芽めく唇端てまさぐり
こゝなる津液の欲せられしを嬉しみつゝ
眞日のぼるときしも顔つくりす

八二 (一五二二)

(九九) abhinata (欲せられし) とは女の唾が男にすはれし
を云ふ(冬一三・參照)。

一六

おほくの糖塊をいだし
あまき米と甘蔗もて怡悦しく
祕戯いらなく愛神の慢成り
いととき人に離れ居る姪女の
むねこがす因なるこの寒時は
おんみらの幸のため恒にあれ

(一〇〇) Kandarpa は「放縱」の意にして愛の神 Kama の
異名なり。こゝにては愛神すなはち情慾にして「愛
神の慢」とは情慾の熾盛なるを云ふ。

VI 春 (一〇二)

一

(一〇一) いとしきひとよ春士愛神は
ワサンタ・ヨロダ (一〇二)

赫く橡菓の芽を鋭き矢とし
まんこ
蜂の列を煌く弓づるとして
つ
たはむれに泥める人の心を
なち
射にぞ來ぬる

(一〇二) 春 (Vasanta) は舊曆の一月十六日より三月十五日
までなり。

(一〇三) Vasanta-yodha は「春の戰士」の意にして愛の神
Kama の異名なり。

二

(一〇四) いとしきひとよ春たつや
樹々は花さき水に連開き
をんなあだめき風かをり

リッ・サンハーラ

ゆふべ悦悦しく畫美しく
うぐは
ものなべて彌々なつかし
いさ

三

いけみづの愛でたさや
つきの光のうつくしさ
婀娜し女のやさしさや
あだめ
たまの帯のまぐはしさ
また花つけし橡菓樹の
まんこ
麗しさをこの春は呈す
ま

四

美女の胡瓜の雕はべに花の
くはしめ
紅そめし羅裳にてよそはれ
いれなみ
ろしもの

八三

(一五二三)

ちうぶら 奶丸は泊芙蘭の黄いろなす
あきぬ 彩衣にて着飾はる

五

あだしめの

耳に似合へるあたらしき牙(一〇三)カルニカラ豎

また揺めく烏羽玉の曲髪(くせがみ)には

無憂華と綻びし八重素馨の花

優しくうつくしきさまを成す

(一〇三) *kanikara* (牙豎)は學名を *Pterospermum acerifolium* とす。

folium とす。

六

アチンガ(二六)を惱まされたる
愛神にこころを惱まされたる

雕うつくしき姝女(たをやめ)のちぶさに
白き梅檀もて潤へる珠の璣珞
腕(かひな)に手纏(たまき)うでわ腰に飾帶(かざりおび)つく

七

麗女(うつくし)の花印(はなじるし)つけたる

金蓮にまがふかほに

たまのほとり眞珠(二〇四)の

つきしが如く美しき

汗たぎち播(はら)りをなす

(一〇四) *staminate* (奶房のほとりに)ともあり。

八

いまやひととき
(一〇五)

カシダルバ(二〇〇)
愛神に満てる身を

あへがせる姝女たやめは

側そばなるいとしをに

あくがれまどへり

(一〇五) stha-bandhana (紐とぎつ)を「筋肉ゆるみつ」と

ふむ。

九

アナンガ(二六)あだめ
愛神は阿娜うつしみ女の現身を

かほそく白くものうく

ともすれば欠あきびがちにし

また艶もてなまめかす

一〇

リツ・サンハ一ラ

たをやめの

酔ひてものうき目に揺ゆらに

ほゝには白く奶房ちぶさにかたく

腰にほそく腠たぐには脹よかに

いまや愛神アナンガ(二六)は千々にやどる

一一

カシダルバ(二〇〇)
愛神は阿娜うつしみし女のうつしみを

ねむけにて物うくなまめかし

言葉を聊かの酒に喋々うらやしくし

また眠まなさしを髻ひそみもて陂なみにせり

一二

なまめける

八五

(一五二五)

酔ひてもの憂きよろしめは
(八七)
プリヤング鬱金うこんさふらんの
色つけし麝香いりの梅檀を
かゞやかしき姉ちぶさにぬる

一三

ゑひしれて現身うつしみものうき人は
おもたきころもを疾はくすてゝ
薫りよき伽羅のかににほへる
くれなる染めしうすぎぬ装ふ

一四

こひこがれて羽毛はねをよだたせ
椽菓まんごのつゆの美酒うまさけに酔心あひこころなる

ほとゝぎすは愛妻はしづまにくちつけ
蓮によりて咳けるこの蜂も亦
つまに嬉しきむつごとをなす

一五

あかき芽房もてしだれ
花咲きて枝うつくしく
風にゆらるゝ椽菓樹まんごじゆは
麗女よろしめの心いと懐らす

一六

ねもとより
珊瑚の色の朱あけなす英はなぶさつけ
芽アシヨリカざしたる無憂樹(七八)みては

若人わかうさのこゝろ有憂サシユカとなる

一七

恋ひ心なる蜂に

美しき花いらなく吻くちつけせられ

栗あえかなる芽そよ風にゆられ撓なめる

ひもとくしばかりの蔓草をみて

こひするをとは胸にわりなき

あこがれを起す

(一〇六) *balainukataika* とあるに據る。

一八

いとときひとよ

好女えなごめのくちの麗色いろにも似て咲きいでし

リツ・サン・ハ・ラ

千日紅の花毬のいみじき美しさ見ては
いづれの身にしみやすき現うつしごゝろか
愛神カシガルバの矢(二〇〇)のさくなだりに惱まされざる

一九

はる立つや日々にいづこも

燃上れる炎めき風にゆられ

華もてしだれし紫針むらの林に

おほはれたる此のおほ地つちは

紅衣装ひし花嫁の如く赫かびよふ

二〇

美女くはしめなつに泥める若人わかうさの心は

鸚鵡の顔色なせる紫針に

八七

(一五二七)

いかでかやぶられざらむ
けにカルニカーラの花に

二二

いかでかこがされざらむ
其れをさらに此の杜鵑は
怡悦しき囀りもて彌ます

二一

さへづり優しく羽毛よだてし杜鵑と
酔ひて和しき言葉つばやける蜂とに

二二

おもはゆく慎しきにひ妻のこゝろは
嫡家にゐてさへ利那にかきみださる

(一〇七) kula-grha は「尊貴の家」ともよめ茲にては「家族の家」とよみ、夫婦の寝る家に對する家族の集ふ家すなはち sayya-grha (閨屋) に對する gun-grha (嫡家) と同一のものと見て「おもや」と譯したり(註五五・參照)。

はるたつや

霜降りすなりて心地よき風は

はな咲きし香檳菓の枝をゆり

四方に杜鵑の囀りひろごらし

ひと心うばひ去りつゝ吹互る

(一〇八) sahakaria は花の香ことによき檳菓の一種なり。

なまめかしき新妻の笑にも似てしろき

素馨もてかじやけるうつくしき林園は

ぼんなう斷ぜし聖者の心すらうばふを

戀に濁りしわかうどの情はなほさらに

はるたつや

金帯まとひ眞珠の瓔珞むねにつけ
 愛神の慢にほそ身しどなき嫁女は
 うらぐはしき杜鵑や蜂のねと共に
 をとこのこゝろを此上無くうばふ

裾野とりふゝに美しき花樹にてかざられ
 をのへは羽毛よだてる杜鵑のこゑにみち
 豊なる岩の面こけの羅網につままれたる
 山ながめては人なべて酔ひごゝちとなる

妻離れて思なやめる旅人は
 花さきし香檬菓の樹をみて
 まなこを閉ぢ泣きかなしみ
 鼻を手障へていたくさけぶ

麗しき春は
 ゑひ心なる蜂や杜鵑のねと
 花咲きし香檬菓や牙臼もて
 いとするどき征矢のごとく
 愛神のそゝりにすねし女の
 むねを刺す

(一〇九) これは嫉妬せる妻が春の景物を見聞きして夫とそ

の情婦との色合ひを想ひて願悲するを云へるなり。

二八

うつくしき様菓^{まんご}のはなのよき矢と

蜂のむれの弦かけしいみじき紫鋤の弓を携へ

月を白無垢^(一一〇)の天蓋マ^(一一〇)ラヤの風を猛れる象とし

杜鵑^{ひま}の伶人を引具し地を順^{まつろ}はし春ともなへる

この愛神^{ヒメミ}はおんみらに幸^{さち}を與へよ

(一一〇) Malaya は Malabar の西にある山脈の名なり。而

してこの山地には梅檀の樹多く、ためにマ^マラヤの風は香しと云はる。

(一一一) Vi-tanu は「無軀」の意にして愛の神 Kema の異名なり。

(完)

昭和九年七月七日に英彦山にて此の梵詩を譯しはじめ同年八月二十五日に東油山にて稿を了へたり。

七

冬七及註八五(第十一輯四三頁上段)修正

「ほのふ」明けにたをやめの
初房^{ちぶさ}ふくよかなる胸^{むね}の邊^{あたり}の
うるはしき肌^きにさしよりて
その刮^{そだ}にやるせなき催^{もよほ}せる
冬^(八五)はくさの葉^はずるにやどる
露^{つゆ}を滴^{した}て泣くにも似たり

(八五) 冬を男になぞらへたり(夏九・参照)。而して斯かる
際には女の泣くが妥當なるに此の句はそれと異なり。

譯字の修正

(イ) 夏五。雨一八・一九。秋一八・二〇。冬五・一四・一六の「嬌女^{たをやめ}」
はいづれも「姝女^{たをやめ}」と修正す。

(ロ) 夏四・五・六。雨二五。秋三・二〇。冬三・四の「腰^{こし}」はいづれも
「脛^{すね}」と修正す、すなはち「しり」なり。而して同じ句のうちに
腰といふ字と共にあるとき以外は脛を假りに「こし」とも讀み
たまへ、なほ云ふ和語の「こし」はときに脛にも通ずるを。

(ハ) 夏九。雨二〇。冬一八の「わかしめ」はいづれも「わかきめ」と
修正す。

第十輯所載「リツ・サンハーレ」

(頁) (段) (行) (修正)

七〇 上 九 「このなつは來ぬ」

同 下 六 「夏をりくに人の怡逸となる」

七十一 「たをやめは愛人のほてりを鎮む」

七二上 一「ねむり果てしかとばかり愛神は

いまや目ざむ」

七二下 三 「いま有明恥らへる様に色さむ」

七六下 六 「火はいやまして燃出でしげに」

同 同 七一樹々のうつろに金色と閃めき」

七九 下 一四 一ふしどにしかといたきしむ」

八 一 下 一 一 雁の坡邊にかき垂れしかみ」

同 同 一五 一「嫁女は愛人の嬉しさゝる」

五 一の心を奪はるめれ」

(誤)

(正)

七
一
上
一
三
腰の

胎
の

七五 上 一二 なぎき

ながき

リ
ツ
・
サ
ン
ハ
ー
ラ

七五 下 六 渴れし

七六 上 一一 藪の

七九下 一二 慄かされし

八〇 上 三 降のつゆ

涸れし

敷也

慄かされし

目
の
つ
ゆ

(頁) (段) (行) (修正)

三五 下 六 「また園生はそけいに眞白にぞせらるゝ」

三六 上 一四 「玉まきの蓮みちたる邊の池塘とは一

三七上三「世づきし少女みづなに似て日ごと生長る」

同上 八「はすの花のこにて色そめなし、川は」

三九 下 一二 「愛女はいとふさやかなる烏羽玉の」

四〇上 七 「また音も優しき玉まきの踝飾を」

同 下 二「あきたつや」

四一上 七 「うつくしき秋立つひかりは」

同 下 一一 「この冬は來ぬ」

四三上 四 「悦びえて幸はふ若き女は」

同 同 六 「くちびる憶ひて高笑まず」

九一(一五三一)

四四	下	八	「鏡を手にせるある郎女は」 いらつめ	三七	下	九	Erythrina	Erythrina
同	同	一〇	「また愛人に津液すはれて」 いとしを つは	三八	下	四	kutaja	kutaja
四五	上	一〇	「ほそ身しなやげる或る若き女は」 め	四二	下	四	あしがさり	あしかざり
同	下	四	「こき垂れしめでたき烏羽玉の」	四四	上	五	いろさむ	いろさむ
同	同	六	「愛人に楽しまれし身を眺めて」 いとしを	同	同	六	priyangu	priyangu
			(誤)	四五	下	八	sobha	sobha
			(正)	同	同	一三	ほとり	あたり
三六	上	三	kalāpa					
			kalāpa					